



## 「名古屋絵付け」伝統的職人技を「のこしたえる」活動の紹介

平成25年から、「名古屋絵付け(名古屋周辺で発達した陶磁器加飾技法)」の「手描き」による職人技を「のこしたえる」活動を同志と共に行っており杉山ひとみと申します。今回、こうした活動の概要と具体的な活動事例の一端を紹介させていただきます。

平成23年、名古屋市東区「文化のみち」周辺において、「文化遺産を活かした観光振興」を目的に、「名古屋文化遺産活用実行委員会」による文化資源の掘り起しが行われました。そこでは、この界隈で明治時代初頭から始まり、その後地場産業として大きく発達した輸出用陶磁器の「絵付け加工業」、またそれを支えた職人たちやその卓越した「技」に光が当てられました。その中で明らかになったことの一つは、時代の移り変わりと共に、「名古屋絵付け」の伝統的職人技が失われつつあるということです。



図1 「凸盛り竜」高木はるゑ



図2 「手描き(洋風絵付け)」市ノ木慶治

平成25年、こうした文化資源の掘り起しが一つのきっかけとなり、職人技を「のこしたえる」ことを目的とした新たな取組が、名古屋陶磁器会館を拠点に、名古屋文化遺産活用実行委員会主催の文化事業(文化庁補助事業)として始まりました。最初に取り上げたのは、名古屋周辺では最後の凸盛り職人となられた高木はるゑ氏が60年以上描き続けた「凸盛り竜」の伝承です【図1】。「イチチン」と呼ばれる金具を使用して描く盛り上げ装飾のことを、職人言葉で「凸盛り(でこもり)」と呼びます。

こうした取組を発信・推進するため、「なごや凸盛り隊」という団体を有志と共に発足しました。現在まで活動を行っている中心メンバーは、古池嘉和氏(名古屋学院大学経済経営研究科教授、元名古屋文化遺産活用実行委員会会長)、安藤栄子氏(厚生労働省認定1級陶磁器製造技能士)、著者の3名です。

「なごや凸盛り隊」としての活動の主な内容は、「凸盛り竜」を学ぶ場の創出の他に、「凸盛り竜」に見出せる技法の実演、凸盛り参考作品の制作・発表、陶磁器加飾(「上絵付け」)関連体験講座の開催などです。とりわけ注目度の高い「ガラス盛り(コラレン)」技法を中心とした技の伝承活動を続けて行っています。また、これまで「やきもの」関係者や一部のコレクター以外、あまり知られていなかった「手描き(洋風絵付け)」【図2】に関わることを取り上げ、文化資源としての活用、保全を目指す活動なども行っています。

こうした活動を始めるにあたり、著者は、まず高木氏の「凸盛り竜」の技を記録として残すことを提案しました。そして、平成12年から独自に続けている名古屋絵付け伝統技法の研究を踏まえ、冊子『凸盛り～名古屋絵付けの伝統技法～』（名古屋文化遺産活用実行委員会発行、平成25年度文化庁文化技術振興費補助金）の技法面での監修をさせていただきました。

「なごや凸盛り隊」としての活動は、名古屋文化遺産活用実行委員会事務局からの希望により、主に同委員会主催の文化事業の中での活動に限られました。そこで、「なごや凸盛り隊」と連動するかたちで、平成27年、CDA会員としても行動を共にする安藤氏との協働により、「アルテデコジャパン」を発足しました。グラフィックデザイナー柳智賢氏 (RYU DESIGN) に素敵なリーフレットを作成いただき、活動を始めました【図3】。



図3 「アルテデコジャパン」リーフレット部分

「アルテデコジャパン」として、また「なごや凸盛り隊」として、これまで陶磁器加飾（「上絵付け」）の普及にも努めてまいりました。その中で、中部デザイン協会主催の上絵に関するワークショップを4回開催いただきました。関係者の皆様のご尽力により、毎回多くの方に参加いただきました。

平成28年、4年間続いた名古屋文化遺産活用実行委員会による職人技を「のこしつつたえる」ことを目的とした文化事業は終了しました。それにより、「なごや凸盛り隊」内部での協働のかたちが大きく変わりました。またこれまでの活動の成果により、陶磁器加飾（「上絵付け」）に関するさまざまなご依頼をいただくようになりました。そのため平成29年以降、活動メンバーそれぞれが専門分野を踏まえ、個別に活動を行う機会が増えました。

このように、活動を取り巻く環境が大きく変わったことに加え、多岐にわたる個別の活動の幅が年々広がったため、「なごや凸盛り隊」と連動して行ってきた「アルテデコジャパン」としての活動が重なるようになりました。そこで令和元年、「アルテデコジャパン」としての活動を終了しました。これまでの「アルテデコジャパン」としての活動の成果は、現在の「なごや凸盛り隊」としての活動の中で活かされています。

紆余曲折を経た活動を振り返ると、活動当初は、活動を推進するにあたり、一部の関係者から、地場産業が衰退してしまった現況において、「いまさら・・・」という否定的な意見もありました。そうした中、中日新聞社渡部圭氏が職人技を「のこしつつたえる」活動を大変丁寧に取材くださり、中日新聞朝刊名古屋市版で大きく紹介くださいました（平成26年3月3日付）。それがきっかけとなり、多くのメディアに取組が取り上げられ、私共の活動も広く知られるようになりました。こうして地道な活動が現在まで続いております。

中部デザイン協会関係者の皆様には、こうした「文化創造」の取組を評価いただき、活動当初からお力添えをいただいております。その一つの事例を記します。平成28年、これまでの活動の課題と「これから」を考えることを目的に、「名古屋絵付け 現在・過去・未来」基調講演・シンポジウムが開催されました（名古屋文化遺産活用実行委員会主催、中部デザイン協会後援）。その際、森本健氏（名古屋学院大学客員教授）をお招きし、ご講演いただきました【図4】。



図4 基調講演の様子



図5 シンポジウムの様子

森本先生は、基調講演の中で、『名古屋絵付けの認知度を高めることが重要であり、また「おもてなし」などをキーワードに、これまで以上に付加価値の高い凸盛り制作を目指す必要がある』と語られました。シンポジウムでは、こうした具体的提言の一つを取り上げ、意見交換を行いました。著者がコーディネーターを務め、パネリストとして、森本先生、安藤氏、長谷川恵子氏、「技の伝承塾」受講生T氏に参加いただきました。【図5】。

またこの機会に、CDA会員としても活躍されている松森健氏（TM design代表）が、高木氏の「凸盛り竜」やそれを「のこしつつたえる」活動を海外に紹介することを目的とした画期的な動画を制作くださいました。次のURLからご覧いただければ幸いです。

<https://www.youtube.com/watch?v=agQmMCKFPNs>

このように、中部デザイン協会に後援いただいた基調講演・シンポジウム等に、多くの方が参加くださり、盛況のうちに終了することができました。

その後、名古屋絵付けの認知度を高め、凸盛り技法などの魅力を広く伝えることを目的とした「凸盛り若冲プロジェクト」(名古屋文化遺産活用実行委員会主催、平成28年度文化庁文化芸術振興費補助金)が企画され、「なごや凸盛り隊」として取り組みました。伊藤若冲の日本画のモチーフを借用し、凸盛りを施すというテーマを受け、直径41cmの美濃焼の白素地に、「ガラス盛り(コラレン)」技法を中心に施し、飾り皿を制作しました【図6・7】。「凸盛り若冲プロジェクト」成果作品は名古屋陶磁器会館でご覧いただけます。



図6 上絵:安藤 栄子



図7 上絵:杉山 ひとみ

「名古屋絵付け」伝統的職人技を「のこしつつたえる」活動の成果は、平成25年から現在まで活動を続け、「のこしつつたえている」ことだと考えています。その中で、本当の意味で職人技を「のこしつつたえる」ためには、森本先生が語られたように、実際の生活空間の中で役に立つモノを「かたち」にして提案する必要がある、ということ強く感じております。

失われつつある職人技を過去のモノとするのではなく、現在に活かし、未来に生かすため、微力ながら、これまでの成果を踏まえ、次の段階に向けて進みたいと思います。

今回、「活動」を紹介する機会をいただき、大変嬉しく思いました。中部デザイン協会入会のきっかけをつくってくださった舟橋辰朗先生、西村知弘先生、関係者の皆様にご心より感謝申し上げます。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

令和2年1月8日 杉山 ひとみ